

皮膚科を楽しむ

人工知能AlphaGoが囲碁九段を打ち破ったというニュースが目に残った。これまでの3千万種のプロ棋士の布石を記憶し、さらに自らと対局して学習する深層学習によってこの快挙に至ったのだという。人工知能は、すでにチェスのグランドマスター、将棋のプロ棋士の打ち破った実績を持っている。これは驚くべき進歩だという。人工知能によるAI文化の進歩は目覚ましく、筆者のようなアナログ文化を楽しんでいる昔人間には到底ついていけない世界である。そんな凡人の行いも人工知能からはお見通しということなるのだろうか。型にはめ込む考え方を拒否し続けながら生きてきたのだが、それも人工知能の手のひらの中での出来事になってしまうのだろうか。素晴らしい進歩であるが、反面、恐ろしさと侘しさを感じさせる。人工知能の導入により、日々の労働時間は短縮し、はては、全人類が失業に追い込まれるのではないかという話も持ち上がりつつある。

日頃の活動である皮膚科診療を振り返ると、これまで得てきた経験則を駆使して診断と治療を組み立てている。近年の定型文化の所為か、略語が蔓延し、ガイドラインが横行し、皮膚病の面白さが失せつつあるのを嘆いている。あるとき、略語を駆使して話している若手に、その略語もとの言葉をこっそり訊ねたことがある。すると、蔑むような眼差しでこちらを眺められたのだが、最後まで答を教えていただくことができなかった。

皮膚病の診断は、皮膚に表現される症状の形態、性状、色調、分布などの情報を集め、それを総合して分析することによって行われている。ここに人工知能が入ってきたらどのようなのだろうか。センサーに皮膚をかざしてスイッチを押すと診断名が画面に現れるようになるのだろうか。診断が決まれば「次へ」のボタンを押して「治療薬」ボタンを押すと、機械から軟膏と内服薬がゴトンという音と共に出て、同時に使い方を記した紙切れがプリントアウトして排出されることになるのだろうか。ここまで来ると皮膚科医の役割はなくなってしまう。お飯の食い上げである。「医者が暇であることは人類が平穏な証拠である」と高をくくっている場合ではなさそうである。ありがたいことに今のところ、皮膚症状を十分に感知できるセンサーが出来上がっていないし、また、さらに重要な皮膚病に対する考え方のデータが整備されていないので、何とかお飯を食いつながっているのだが、これも時間の問題かもしれない。患者にわかりやすい医療が推奨されている現状では、医療の機械化が推進されるので、人工知能を駆使した機器の医療への進出が加速されることにもなる。

皮膚病診療の神髄はもっと面白味のあるものであると信じている。先人の努力の結果、多くの皮膚科遺産が積み上げられている。同じ皮膚症状を発している、生命現象の織り成す結果が皮膚病として表現されるので、個々の症状に多様性があり、また、その原因も多種多様である。それらを探しあてるのが皮膚科医である。思いもかけぬ正解に出くわすこともしばしばである。皮膚科の研究分野では日々新しい発見が報告されているが、臨床皮膚科にこそ、もっと楽しい発見が待っているのではなからうか。皮膚科診療がもっと楽しくなるはずである。是非とも皮膚科臨床を楽しめるものにしていただきたいと願っている。

西岡 清